中村町遺跡1

－中村町遺跡群第1次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第373集

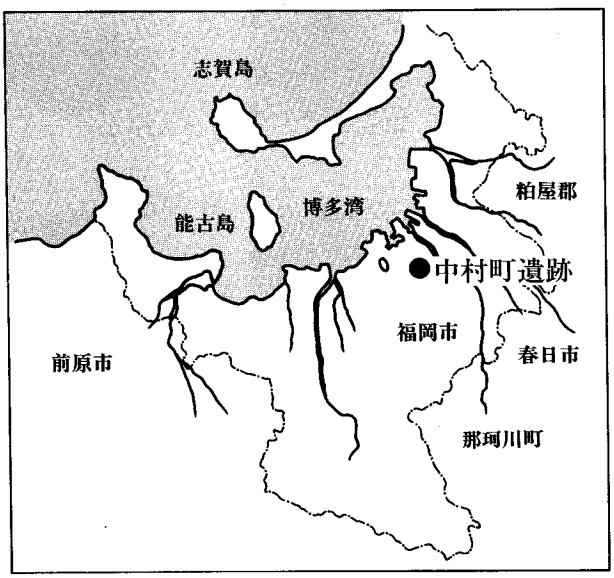
1994

福岡市教育委員会

中村町遺跡 1

－中村町遺跡群第１次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第373集



遺 跡 略 号　NMM－1
遺跡調査番号　9044

１９９４

福岡市教育委員会

序

北方に広がる玄界灘の海を介して大陸と対面した福岡市では、その人、物、文化の交流が、先史時代より絶え間なく続けられてきました。この人々の営みは埋蔵文化財として現代に語りかけてくれます。

本市では、文化財の保護と活用に努めていますが、多様な開発によりやむをえず失われていく遺跡については発掘調査による記録保存をおこなっています。

今回の発掘調査では古墳時代の集落跡や古代の権力者の居宅跡とも考えられる大型建物跡が検出され、過去の生活を復元する多くの資料を得ることができました。

本書は、こうした調査成果を収めたもので、研究資料とともに、埋蔵文化財に対する御理解と活用への一助となれば幸いです。

最後に、調査に際しご協力頂いた、地権者、工事関係者、関係各位の皆様に厚くお礼申しあげます。

平成6年3月31日

福岡市教育委員会

教育長　尾花　剛

例　言

1.本書は福岡市南区野間三丁目233、234-1、234-2、236、237の発掘調査報告書である。
2.調査は荒牧宏行が担当し、執筆した。
3.本書掲載の遺構・遺物実測図、写真撮影は荒牧が行なった。
4.浄書は井上加代子、荒牧が行なった。
5.本書に掲載した実測図、遺物を含め調査によって得られた資料類は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管され公開し活用していく予定である。

凡　例

1.本書使用の方位は磁北である。
2.遺構は通し番号を付し、SC(竪穴住居跡)、SB(掘立柱建物跡)、SD(溝)の略号を記した。
3.挿図のアミ部分については各項で説明を行なう。

遺跡調査番号	9044		遺跡略号	NMM-1	
調査地地籍	南区野間3丁目233、234-1、234-2、236、237			分布地図番号	051-A-3
開発面積	1338m²	調査対象面積	821m²	調査実施面積	821m²
調査期間	1990年11月21日～1991年2月28日			事前審査番号	2-2-73

本文目次

I　はじめに
(1)調査に至る経過 ……1
(2)調査体制 ……2
II 位置と環境
(1)地形 ……2
(2)周辺遺跡 ……2
III 調査の記録
(1)層序 ……6
(2)竪穴住居跡
01(SC) ……6
02(SC) ……6
04(SC) ……9
03(SC) ……9
06(SC) ……12
07(SC) ……12
012、013(SC) ……13
014(SC) ……14
015、016、017(SC) ……16
(3)掘立柱建物跡
018(SB) ……18
019(SB) ……19
(4)溝
05(SD) ……20
08(SD) ……20
010(SD) ……20

挿図目次

Fig.1　中村遺跡群と周辺遺跡分布図(1／25,000) ……3
Fig.2　旧地形図(1／20,000　明治23年作成) ……4
Fig.3　旧地形図(1／5,000　昭和5年作成) ……5
Fig.4　周辺位置図(1／1,000) ……5
Fig.5　遺構全体図(1／200) ……折り込み
Fig.6　01、02、04(SC)実測図(1／60) ……7
Fig.7　02(SC)カマド実測図(1／40) ……8
Fig.8　02(SC)出土土器実測図(1／4) ……8
Fig.9　02(SC)出土石器実測図(1／3) ……9

Fig.10　03(SC)実測図(1／60) ……10
Fig.11　03(SC)出土遺物実測図(1／4) ……10
Fig.12　03(SC)カマド実測図(1／40) ……11
Fig.13　03(SC)カマド出土遺物実測図(1／40) ……11
Fig.14　06(SC)実測図(1／60) ……12
Fig.15　06(SC)カマド実測図(1／40) ……12
Fig.16　06(SC)出土遺物実測図(1／4) ……13
Fig.17　07(SC)実測図(1／60) ……13
Fig.18　07(SC)出土石器実測図(1／3) ……13
Fig.19　07(SC)出土遺物実測図(1／4) ……14
Fig.20　012(SC)実測図(1／60) ……14
Fig.21　014(SC)実測図(1／60) ……15
Fig.22　014(SC)出土遺物実測図(1／4) ……16
Fig.23　017(SC)出土石器実測図(1／3) ……16
Fig.24　015、016、017(SC)実測図(1／60) ……17
Fig.25　018(SB)実測図(1／60) ……18
Fig.26　019(SB)実測図(1／60) ……19
Fig.27　019(SB)柱穴出土遺物実測図(1／4) ……20
Fig.28　020(SB)実測図(1／60) ……20
Fig.29　06(SD)出土遺物実測図(1／4) ……20
Fig.30　02(SC)出土石器実測図(1／2) ……21

図版目次

PL.1　調査区東半(北西から)
　　調査区西半(東から)
PL.2　調査区南西部(北西から)
　　02(SC)、04(SC)完掘状況(北から)
PL.3　02(SC)カマド付近土層(北東から)
　　02(SC)カマド完掘状況(南西から)
PL.4　03(SC)完掘状況(北東から)
　　03(SC)カマド完掘状況(東から)
PL.5　06(SC)、07(SC)、08(SD)完掘状況(北から)
　　06(SC)カマド完掘状況(北西から)
PL.6　07(SC)完掘状況(北から)
　　012(SC)、013(SC)完掘状況(北西から)
　　014(SC)完掘状況(東から)
PL.7　020(SB)完掘状況(北から)
　　出土石器
PL.8　出土遺物

Ⅰ はじめに

(1) 調査に至る経過

本調査地点は福岡市南区野間三丁目233、234、236、237に位置する。平成2年5月21日にダイア建設株式会社から共同住宅建設に先立ち埋蔵文化財事前審査願が福岡市教育委員会の埋蔵文化財課に提出された。これを受け当課では書類審査を行い、事業計画地が中村町遺跡群に呼称される埋蔵文化財包蔵地であるため試掘が必要と判断した。試掘は同年6月6日と7月5日に実施した。試掘では遺構が検出され、建築工事に先立って発掘調査が必要とされた。その後協議を重ね、施主の株式会社東亜コンサルタンツと委託契約を締結し発掘調査を行なう運びとなった。

発掘調査は平成2年11月21日から平成3年2月28日にわたって実施した。調査対象地は遺構の遺存状況から南側の821㎡とした。

(2)調査体制

本調査においては以下の組織で臨んだ。

調査主体：福岡市教育委員会

調査総括：埋蔵文化財課長　柳田純孝
埋蔵文化財第2係長　柳沢一男

事前審査：文化財主事　横山邦継　係員　吉留秀敏(試掘担当)

庶　　務：埋蔵文化財第１係　松延好文　吉田麻由美

調査担当：埋蔵文化財第2係　荒牧宏行

調査作業：扇　貞夫　柴田　博　松井一美　境　寛　三浦義隆　石橋テル子
斎藤初枝　徳永ノブヨ　萬スミヨ　大神玲子　その他

整理作業：池見恭子　安部国恵　田村妙子　山口英子　片野ゆき子　小西千晶
根本哲也　海士野悦代　坂井美穂

II 位置と環境

(1)地形

北側を玄海灘の海に面し、背後に三群山塊、脊振山塊を控えた福岡市の平野部は派生した丘陵により東から粕屋平野、福岡平野、早良平野、糸島平野に分けられる。中村町遺跡群はこの狭義の福岡平野の西側に派生する丘陵に位置する。

福岡平野は東を月隈丘陵、西を平尾丘陵に限られ、その中央を三笠川、那珂川が流下する海岸平野である。南方の片縄山(標高292m)から福岡平野の西側を北へ向かって派生していく丘陵は「鴻巣山(標高100m)を主とする標高60～100mの孤立丘陵が散在する。福岡平野ではこれらの丘陵の大部分が古第三系からできていて、そのほとんどが堆積物をのせていない。」(福岡市付近の平坦面の地史学的研究　浦田英夫　1961年)

本調査区は平野部を臨む丘陵先端に位置する。この先端部は独立して標高約20mの項部があり、調査地点は南西へ下降する斜面に位置している。付近は開析を受けた丘陵が入り組み、谷間を若久川が流下する。

(2)周辺遺跡

福岡平野には多くの遺跡を内包するが、特に平野部において春日市の須玖・岡本遺跡、福岡市の比恵・那珂遺跡群をはじめとする弥生時代の拠点集落が注目される。出土した多くの青銅器類、鋳造関連遺物や墳丘墓、環濠等の遺構は「奴」国の繁栄と権力の大きさを感じさせる。本調査区を含む福岡平野の西側丘陵においても高宮八幡宮所蔵の広型銅戈鋳型、野間門ノ浦で、三宅岩野で細型銅矛が発見された。なお、福岡平野の東側に派生する月隈丘陵においても、宝満尾遺跡の内行花文明光鏡、赤穂ケ浦の銅鐸鋳型にみられるように、丘陵部を含めた広範囲に「奴」国の存在を見るように思える。

古墳時代になると那珂川、三笠川の両河川に沿って首長墓の系譜がみられる。那珂川西岸沿いで前方後円墳の老司古墳、卯内尺古墳、円墳の寺塚穴古墳がその大きさ、出土遺物等からあげられる。後期群集墓も数多く確認され、柏原古墳群、駄ケ原古墳群等が調査され解明されている。

本調査地点付近は宅地化が進み、旧地形がかなり改変されていることから消滅している遺構も多いものと推測される。調査例は少ないが、野間B遺跡では3次にわたる調査によって古墳2基、弥生時代中期の竪穴住居4軒等を検出し、尾根線上の集落を明らかにした。なお、瓦片も出土し、瓦窯の存在している可能性がある。

1　那珂遺跡群
2　高宮B遺跡
3　高宮A遺跡
4　野間B遺跡
5　野間A遺跡
6　中村町遺跡
7　寺塚A古墳群
8　寺塚B古墳群
9　若久A遺跡
10　若久B遺跡
11　大橋A遺跡
12　大橋B遺跡
13　大橋D遺跡
14　大橋C遺跡
15　三宅瓦窯址
16　三宅廃寺
17　和田田蔵池遺跡
18　三宅C遺跡群
19　横手遺跡群
20　三宅B遺跡群
21　和田A遺跡群
22　和田B遺跡群
23　屋形原遺跡
24　野多目浦ノ池遺跡
25　野多目浦ノ池遺跡B遺跡群
26　野多目浦ノ池A遺跡群
27　野多目浦ノ池C遺跡群
28　日佐遺跡群
29　上日佐遺跡群
30　花畑C遺跡群

Fig.1　中村遺跡群と周辺遺跡分布図(1/25,000)

1　那珂遺跡群
2　高宮B遺跡
3　高宮A遺跡
4　野間B遺跡
5　野間A遺跡
6　中村町遺跡
7　寺塚A古墳群
8　寺塚B古墳群
9　若久A遺跡
10　若久B遺跡
11　大橋A遺跡
12　大橋B遺跡
13　大橋D遺跡
14　大橋C遺跡
15　三宅瓦窯址
16　三宅廃寺
17　和田田蔵池遺跡
18　三宅C遺跡群
19　横手遺跡群
20　三宅B遺跡群
21　和田A遺跡群
22　和田B遺跡群
23　屋形原遺跡
24　野多目浦ノ池遺跡
25　野多目浦ノ池遺跡B遺跡群
26　野多目浦ノ池A遺跡群
27　野多目浦ノ池C遺跡群
28　日佐遺跡群
29　上日佐遺跡群
30　花畑C遺跡群

Fig.2　旧地形図(1/25,000 明治23年作成)

Fig.3　旧地形図(1/10,000　昭和5年作成)

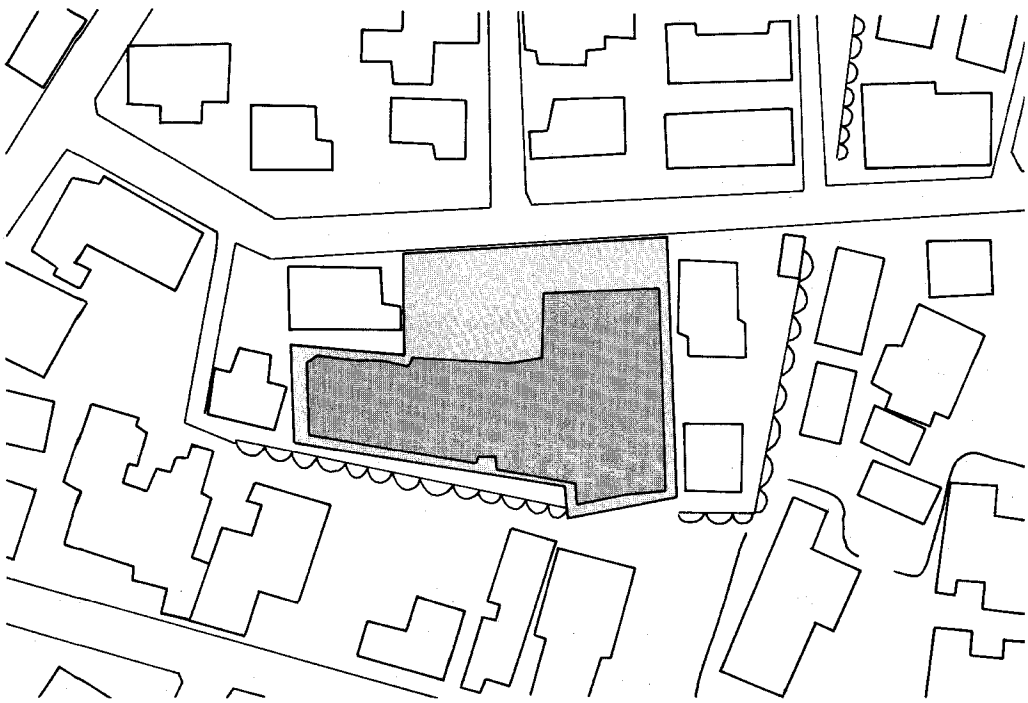


Fig.4　周辺位置図(1/1,000)

III 調 査 の 記 録

(1)層序

調査地点は先述(P－2)の通り独立丘陵状の頂点からやや南と西に下降する斜面上に位置する。G.Lは標高16.1m～15.7mを測り、やや西側に低いが、ほぼ平坦に造成されている。なお、南と東側隣接地はすでに宅地造成を受け、崖状に落ちている。

調査区北東部から中央部にかけては地山の削平が著しく、特に北端付近においてはわずかな客土下から灰黄褐色風化岩盤状の基盤層となり、地山の赤褐色土を逸している。下降していく南東部と西側では地表から－0.2mが現代の客土、－0.4m～0.7mが硬度、粘性がない明褐色土、その下層に地山の赤褐色土が堆積する。包含層の堆積はみない。

このため、削平を比較的まぬがれた、南東部と西側では古墳時代後期の住居跡が密に分布するが、北東から中央部にかけての遺構は皆無に近い。しかし、このような深い削平にもかかわらず北東部にわずかながらも柱穴、溝が検出される事は、この時期、幾分造成されたものと考えられる。

(2)竪穴住居跡

検出された竪穴住居跡は12棟である。集落は調査区全体に広がっていたことが推測されるが、上記のとおり調査区南側と西側においてのみ検出された。南東部の斜面上ではとくにその遺存は良好で、02(SC)の壁高は76cmを測る。全体的に住居跡の密度は濃く、切り合っている。時期的には古墳時代後期の短期間にまとまる。

01(SC)

調査区南東部で検出された。大半が調査区外で、02、04(SC)に切られてプランは不明。壁高は8cmで遺存が悪く、部分的に貼り床がみえていた。壁溝は検出されない。出土遺物は須恵器、土師器の細片が少量出土したのみで、坏身片から6c中葉以降と考えられる。

02(SC)

調査区南東部で検出された。01、04(SC)を切る。検出時に北側の円形土壙(021)を北辺の延長と誤認したため同時にほりさげた。南側は淡灰褐色砂土の埋土の05(SD)に切られる。壁高は76cm以上を測る。規模は不明であるが、北コーナーからカマド中央までの辺長は3.1mを測

Fig.5　遺構全体図(1/200)

り、03(SC)と類似する。壁溝は北辺に幅10cm、深さ2cmで検出された。西辺側には土層観察により(Fig.6土層図)カマド付近に幅35cmの壁溝状の落ち込みがみとめられる。

カマド

西辺で検出された。焼成部の幅60cm、奥行75cmを測る。袖部は灰褐色粘土ブロック混じりの褐色土で構築されているが、崩壊と識別が困難であり、遺存は悪い。焼成部に支脚はないが、環状に土器片が出土した。

遺物

1～7は須恵器、8～10は土師器である。1は検出時に出土。外面の回転ヘラケズリは体部1/2弱にわたり施され、中心までその痕跡を明確に残す。口縁部へ屈曲する部位に浅い凹線が巡る。色調は淡褐色を呈し、焼成不良である。内面天井部の中心付近に同心円文の当具の痕が残る。口唇部に細い沈線が巡り、端部は丸く収める。内面のヨコナデの起伏が著しい。2は埋土下層から出土。天井部は扁平ぎみで、外面の屈曲した部位よりやや上方から回転ヘラケズ

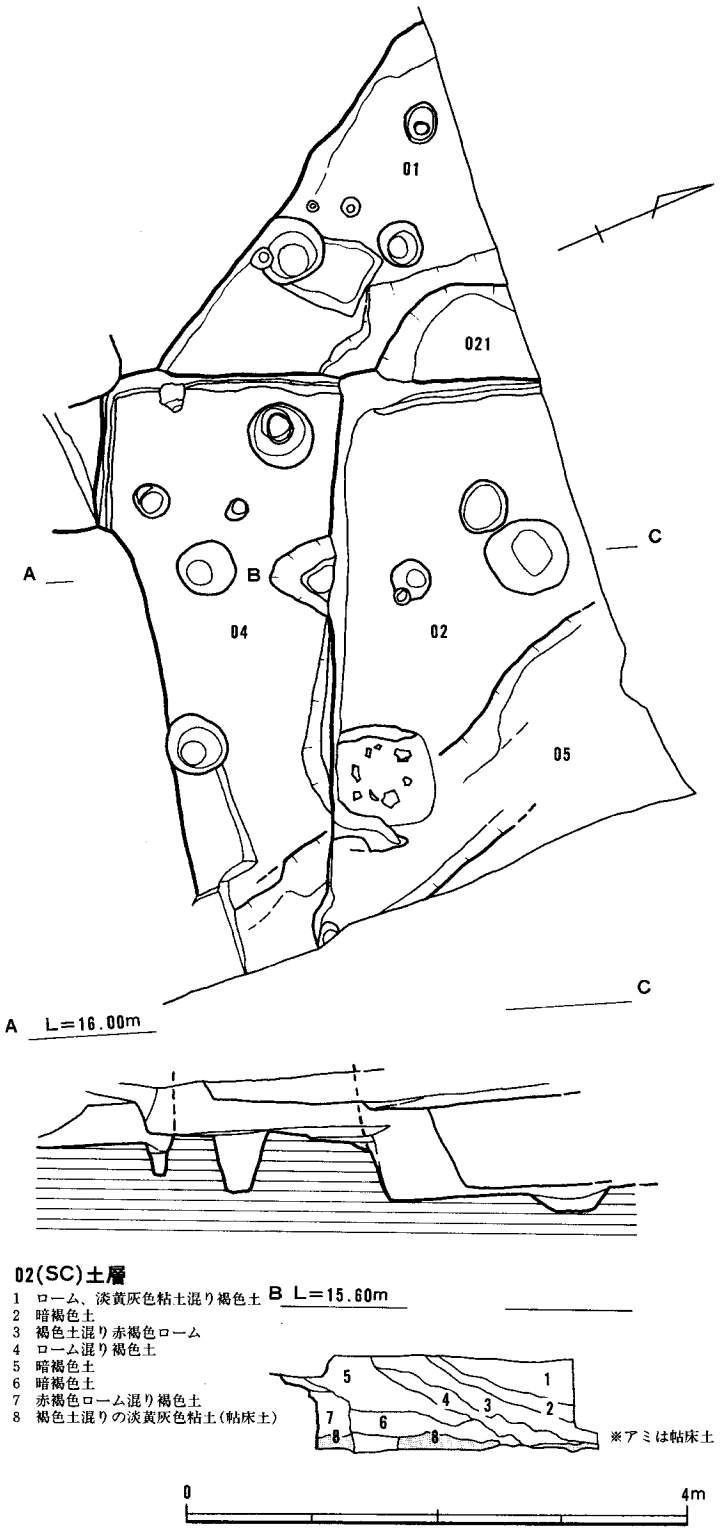


Fig.6 01、02、04 (SC)実測図(1/60)

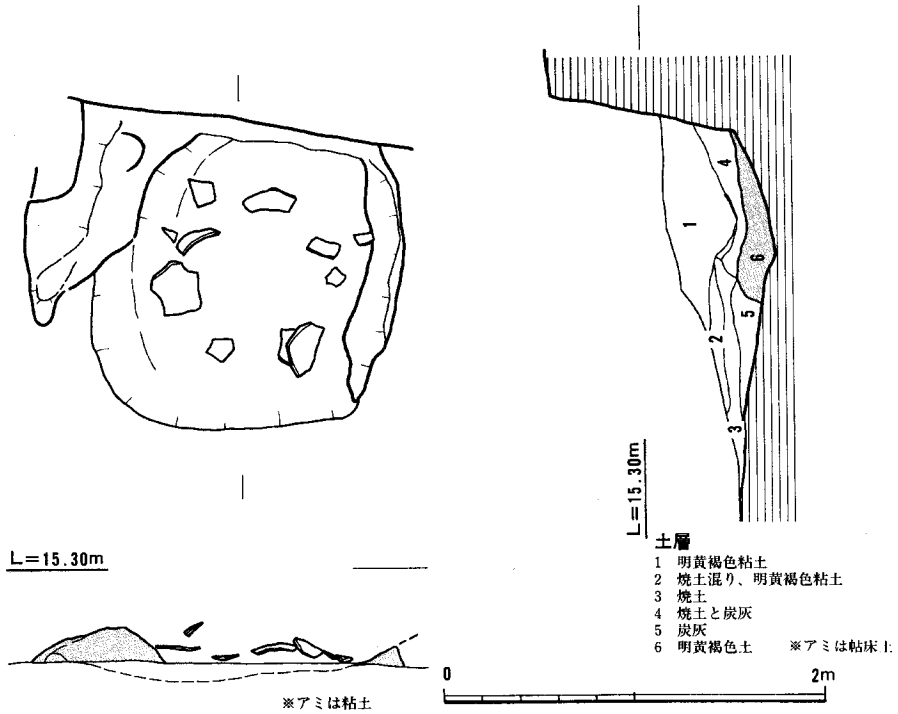


Fig.7 02(SC)カマド実測図(1/40)

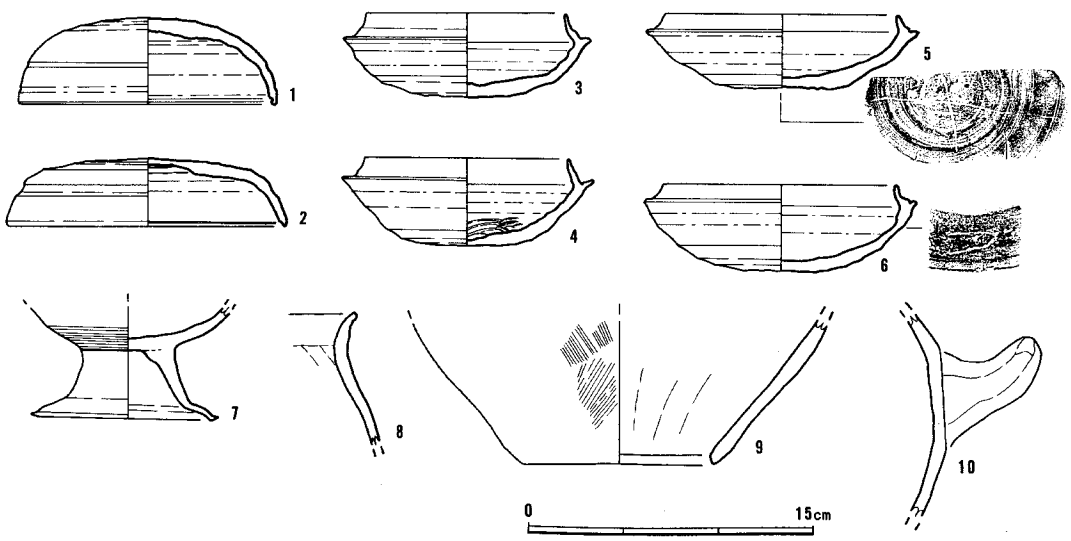


Fig.8 02(SC)出土土器実測図(1/4)

りがはじまる。その痕跡は中心までとどめている。口縁部へ屈曲した位置に浅い幅広の凹線が巡る。内面天井中心部に浅く当具の痕が残る。口唇部に細い沈線状の段を有している。3はカマド袖部内から出土。遺存は1/2弱である。受部に重ね焼き時のものか、粘土が貼り付く。4は埋土下層より出土。内底面に青海波文の当具の痕が残る。5は埋土下層より出土。口縁部の立ち上がりは短く、底部は扁平である。外底部にヘラ記号を有す。6は検出時に出土。体部の1/2以上にわたり回転ヘラケズリを施す。外面体部にヘラ記号を有す。7はカマド付近より出土。脚裾は内湾して外方に延び、端部は跳ね上がる。脚部内面にヘラ記号の一部が残る。8は埋土下層より出土。内面胴部にヘラケズリを施す。9は埋土中位より出土した甑の底部である。10は床面近くより出土。

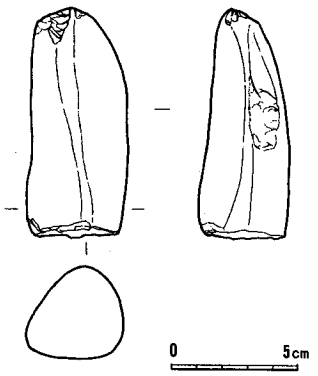


Fig.9 02(SC)出土石器実測図(1/3)

04(SC)

調査区南東部で検出された。02、03(SC)に切られる為、プランは不明。壁高は良好に残る北辺で37cmを測る。遺存する北辺と西辺の一部に幅8cm、深さ5cmの壁溝が巡る。出土遺物は土師器の甕片等少量であるが、6c中葉以降と考えられる。

03(SC)

今調査で最も良好にプランを把握できる住居跡である。調査区南東部で検出され、04(SC)を切る。北辺3.10m、カマド中心からの西辺の長さは3.22mを測り、比率差が大きい長方形プランが推定される。壁高は良好に残る北辺で58cmを測る。壁溝は検出された全辺に沿って幅8～15cm、深さ2～6cmで巡る。主柱穴は配置からP_1、P_2が考えられる。なおP_1は崩壊したカマドの灰色粘土下から検出された。

カマド

西辺に構築され、遺存は比較的良好である。焚口前面幅67cm、焼成部中央45cm、奥行57cmを測る。袖部は幅25cmが識別され、主に黄灰色粘土で構築されている。袖内には土師器片が混在していた。焼成部の下底は浅皿状に焼土が堆積し、前面は一段落ちて、掻きだしと考えられている炭層がみられた。焼成部中央に、坏部と脚裾を欠いた高坏を黄灰色粘土で下部を固定し、支脚として使用している。この周囲から土師器の甕片が出土。

遺物

11、12は須恵器、他は土師器である。11は埋土中から出土。外面の口縁部へ屈曲していく部位に凹線状の段を有す。口縁端部は外反する。12はカマド付近から出土。小片のため口径に誤差がある。13は図示した床面上から出土。外面の口縁から胴部の一部まではヨコナデ、胴部の

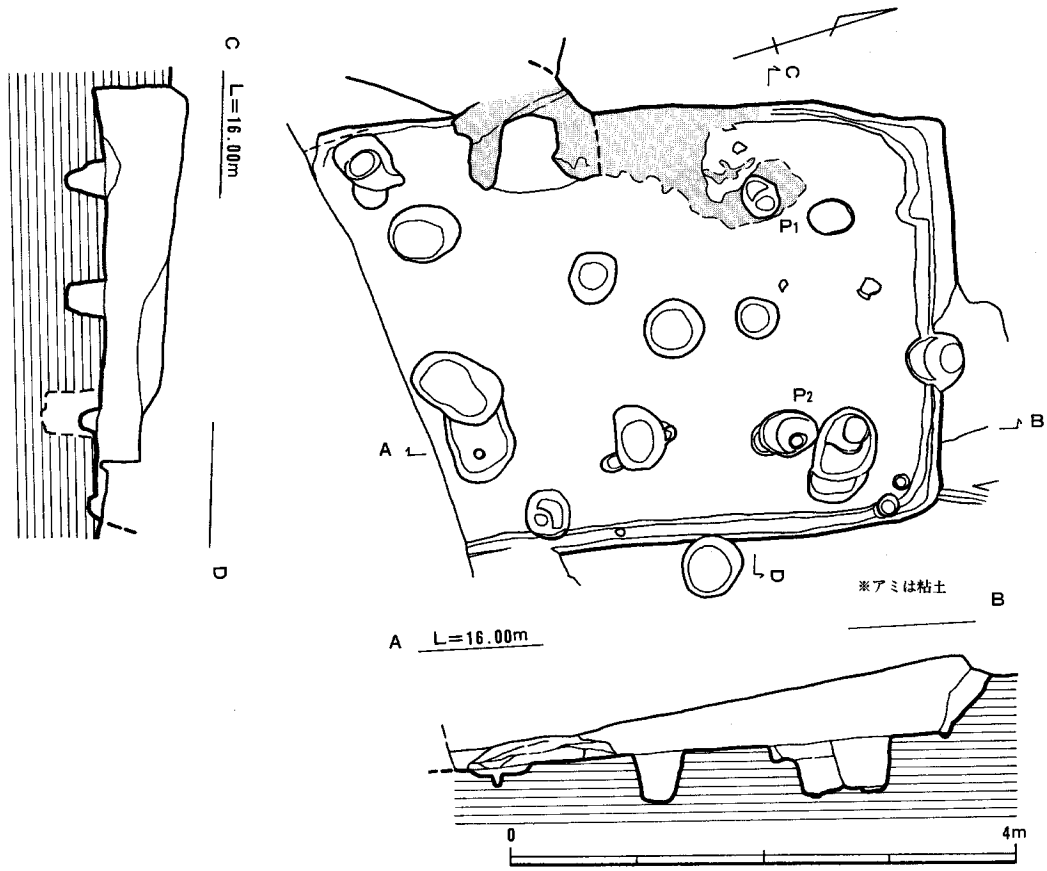


Fig.10　03(SC)実測図(1/60)

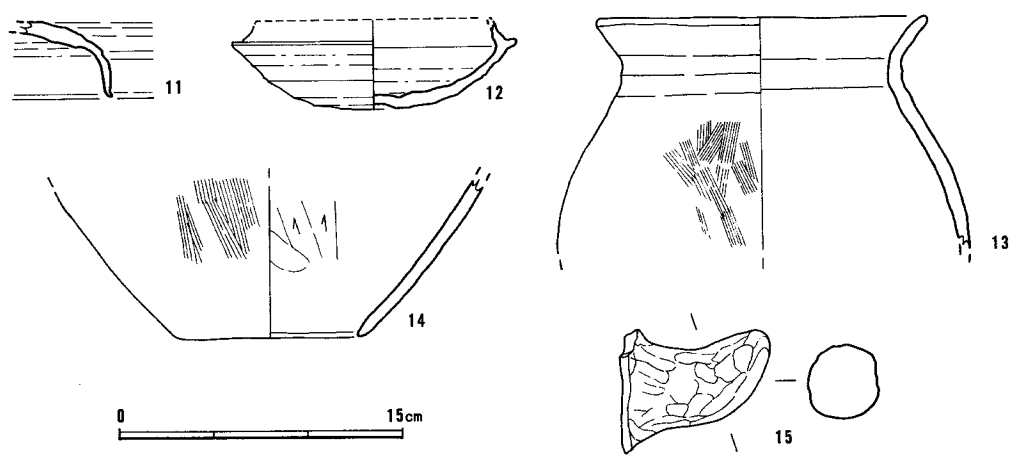


Fig.11　03(SC)出土遺物実測図(1/4)

縦ハケの上からもナデを施す。15の把手はカマド付近から出土。16はカマドの焼成部から出土。図示部分の1/2周が遺存する。内外面の口縁から外面胴部一部までがヨコナデ、内面頚部以下はナデを施す。17は焼成部中央に置かれ、支脚に利用された高坏脚部である。器面があれて、調整不明。

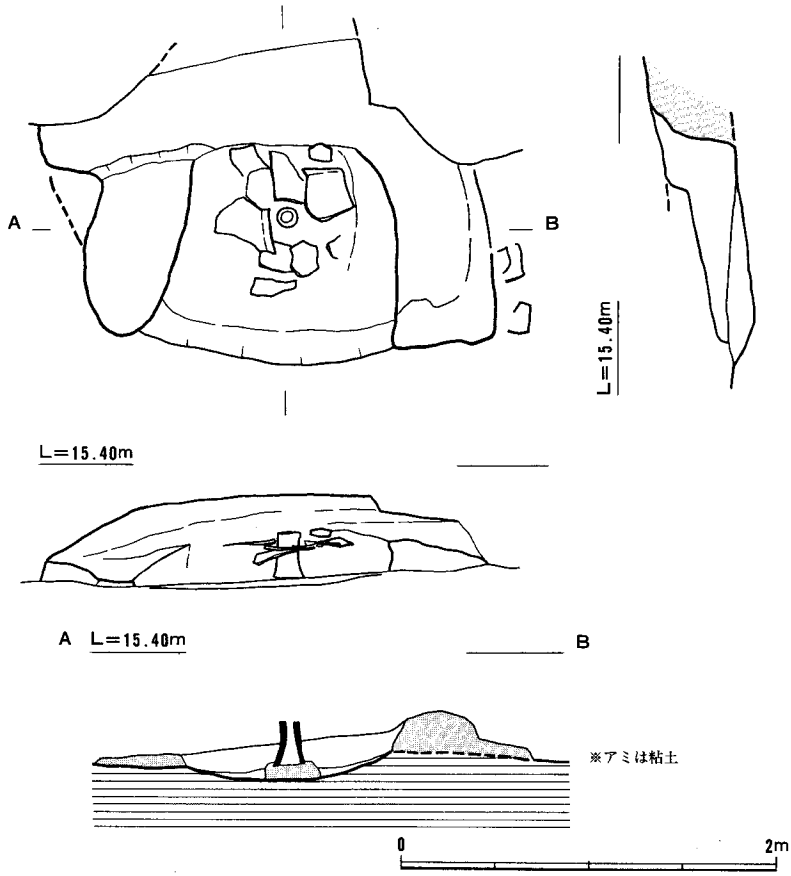


Fig.12 03(SC)カマド実測図(1/40)

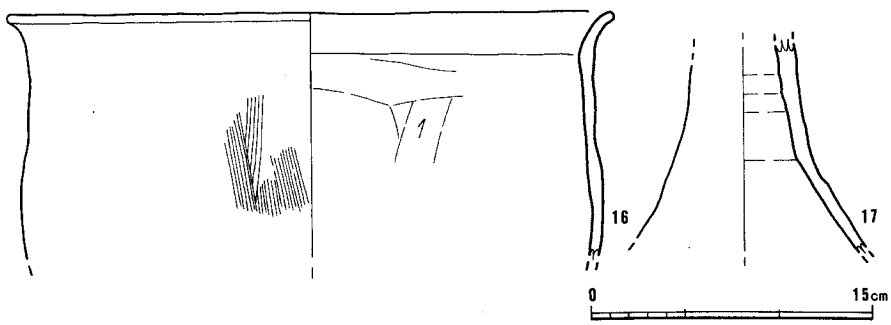


Fig.13 03(SC)カマド出土遺物実測図(1/4)

06(SC)

調査区南東部で検出された。03(SC)のカマドが北東コーナーを、西側は07(SC)が切る。南側は調査範囲外である。壁高は北辺側で23cmを測り、壁に沿って、幅10cm、深さ6cmの壁溝が巡る。東辺にカマドの一部が検出された。

カマド

焚口の幅105cm、焼成部の奥行100cmを測る。本体は黄褐色粘土で構築されているが、裾部は住居内には延びず、外へ突出する形態をとる。焼成部内から高坏片等の土器片が少量出土。

遺物

18、19は須恵器、20は土師器である。18は埋土中から出土。外面の回転ヘラケズリは体部の2/3まで及ぶ。内面底部に当具の跡と思われる荒れた箇所が約1cm幅で環状にみられる。外面の遺存する部分に2線のヘラ記号を有す。19はカマド内より出土。内底部に同心円状の当具の痕がみられる。20はカマド焼成部より出土。外面の脚裾に段を有す。径1cmの穿孔は3箇所以下と推される。器面があれ、内外面の調整は不明である。

07(SC)

調査区南側で検出された。08(SD)が中央を切る。北辺長4.30m、壁高は貼り床をやや掘り過ぎているが45cmを測る。壁溝は幅10cm、深さ4cmで巡る。主柱穴はP_1、P_2が考えられ、各深さは25cm、40cmを測る。

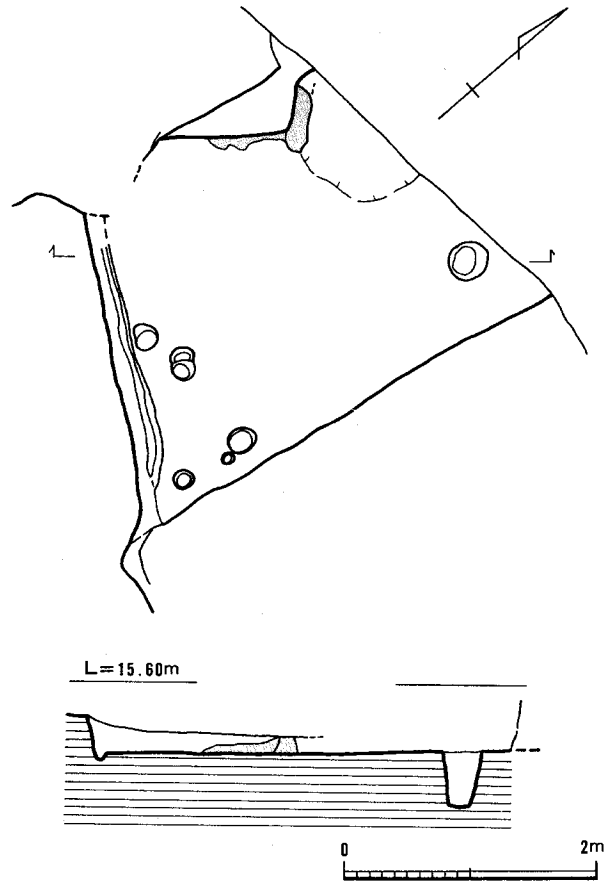


Fig.14　06(SC)実測図(1/60)

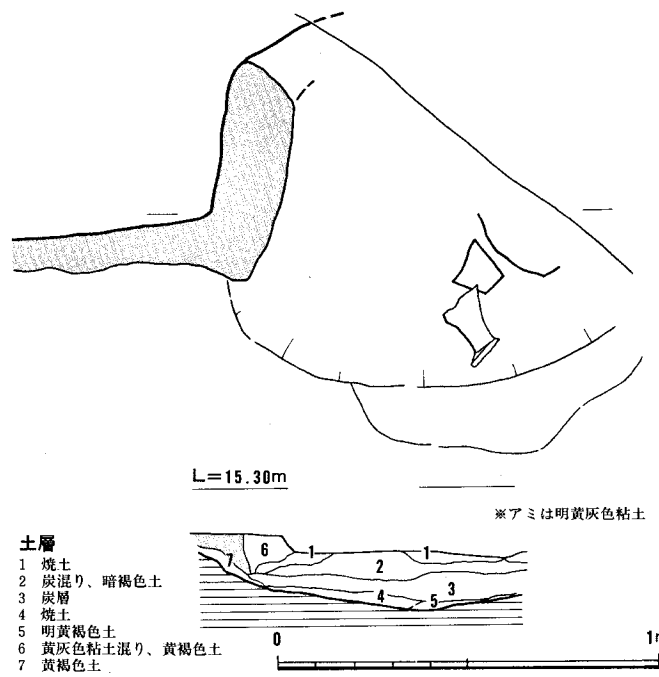


Fig.15　06(SC)カマド実測図(1/40)

遺物

21は東壁近くの床面から10cm浮いた位置で出土。径14cmに復元できる磨石である。磨面に節理がみられ、裏面には敲打痕を残し荒れている。

28は土師器、他は須恵器である。22は06(SC)と切り合う東側から出土。外面の口縁へ湾曲していく位置に凹線が巡る。口唇部は外反し、内面に凹線状の段を有す。内面天井部にハケ目が僅かに残る。23は比較的遺物が多く出土した東半部の床面上から出土。口縁部へ湾曲していく位置に浅い凹線状の段を有す。内面天井部に青海波文の当具の痕が残る。外面にヘラ記号の一部がみられる。24は東側の床面から少し浮いた位置から出土。外面の回転ヘラケズリは体部の2/3まで及ぶ。内面底部にハケ目の痕が残る。25は08(SD)と切り合った位置の床面上から出土。内面底部の一部が環状にあれている。当具の痕か。

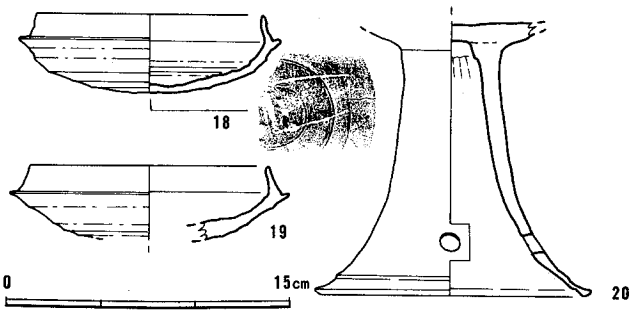


Fig.16　06(SC)出土遺物実測図(1/4)

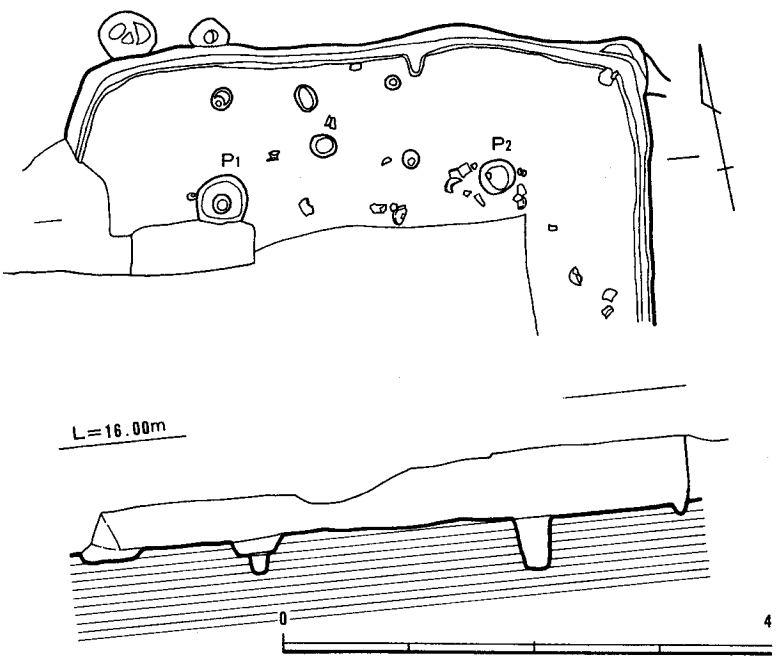


Fig.17　07(SC)実測図(1/60)

26は中央部のほぼ床面から出土。27は東側の床面から少し浮いた位置から出土。口縁部に櫛歯列点文が弧状に配されているが全周しない。28は火熱を受け、外面の調整不明。内面は肥厚した位置までヨコナデを施す。

012、013(SC)

調査区の中央部南側で壁溝のみ検出された。012(SC)の北辺の延長は撹乱を受けた位置までとらえられ、延長

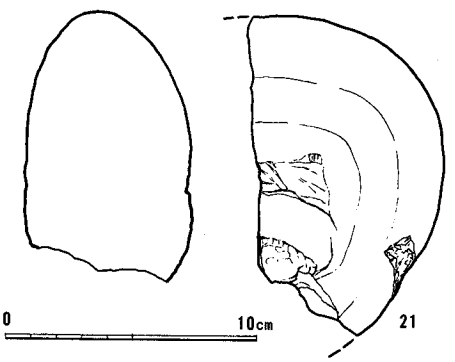


Fig.18　07(SC)出土石器実測図(1/3)

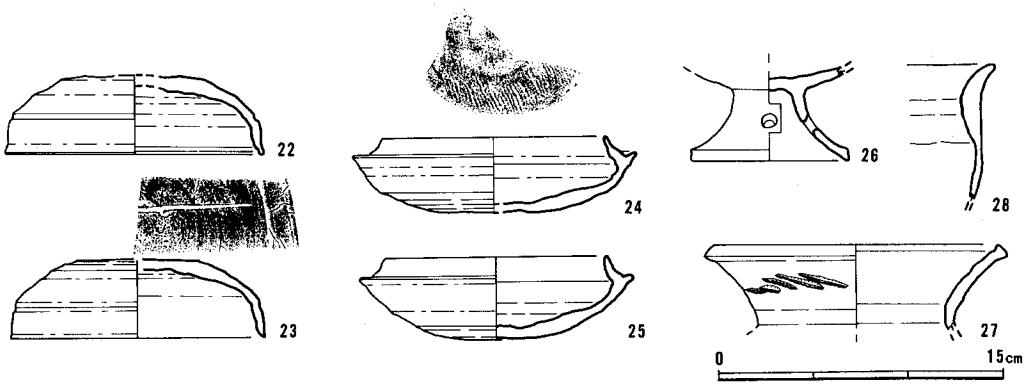


Fig.19　07(SC)出土異物実測図(1/4)

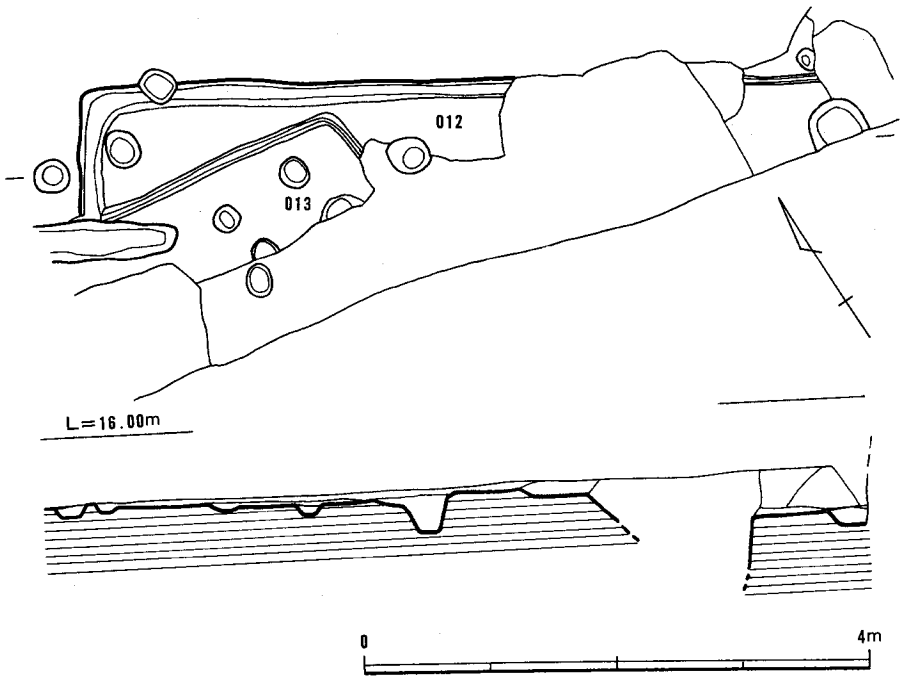


Fig.20　012(SC)実測図(1/60)

方向に検出された壁溝は床面のレベルが異なる別の住居跡である。012(SC)の壁高は2cm、012の床面までの掘削後で幅8cm、深さ3cmの013(SC)壁溝が検出された。

014(SC)

調査区西際で検出された。南辺は不明瞭で南東コーナーが確実ではないが、東辺長約5.5mを測る。壁高35cm、壁溝が幅12cm、深さ3cmで巡る。主柱穴はP_1、P_2を含む4本柱と推される。調査区西壁近くから焼土が検出された。南側に貼り床が厚い為、掘りすぎているが、旧地形に合って本来の床面は西側に傾斜している。

遺物

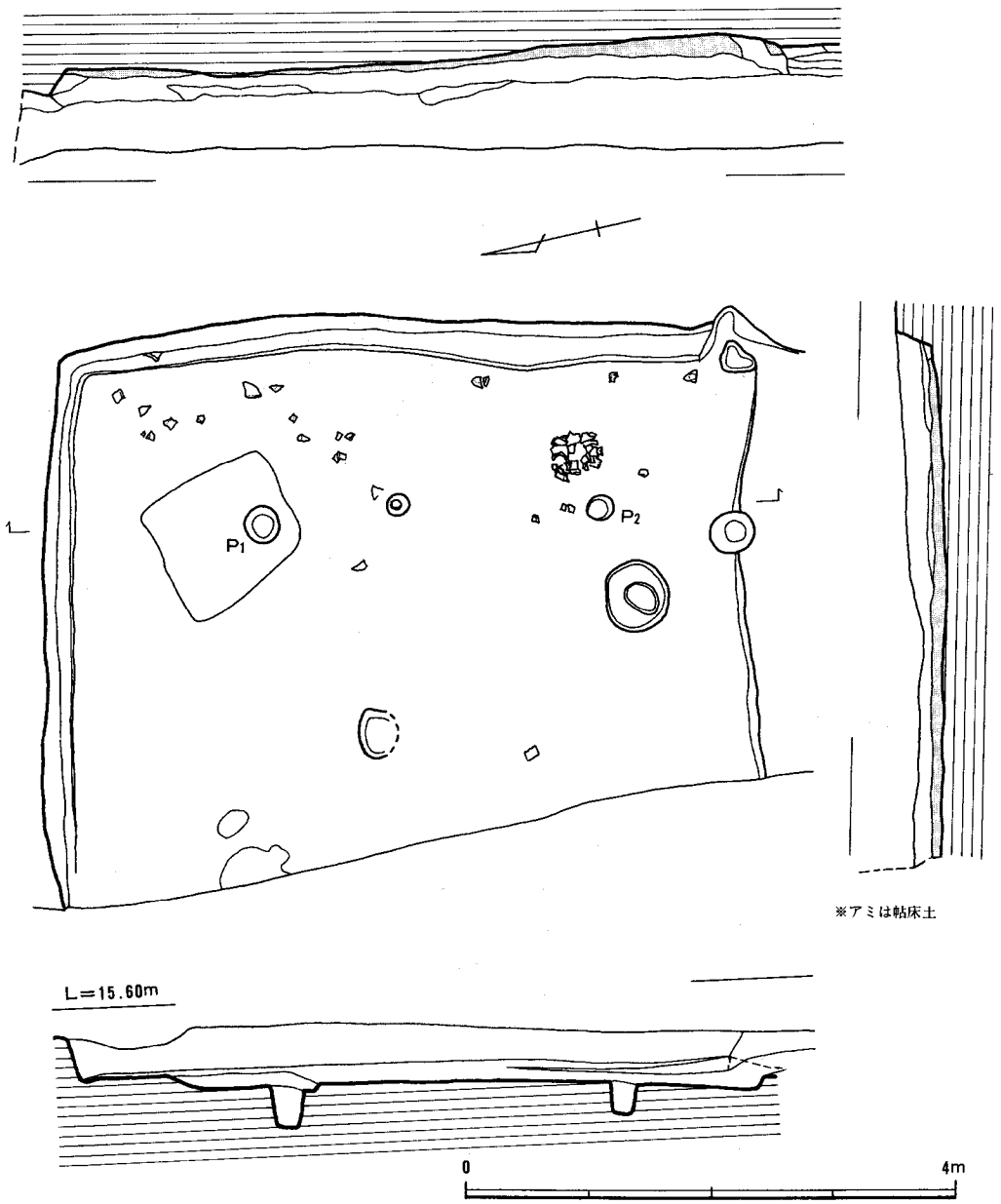


Fig.21　014(SC)実測図(1/60)

29～31は土師器、32～35は須恵器である。出土位置は平面図に図示しているが、床面近くの遺物は東辺よりに出土。30、35は床面上、他は10cm程浮いた状態で出土。29は北東コーナーから15cm浮いた位置から出土。底部は平坦に近く、内面の指頭痕は著しい。30は脚部のみ完存している。32は口縁部へ湾曲していく位置に凹線上の段を有し、口唇部も凹む。内面天井部に当

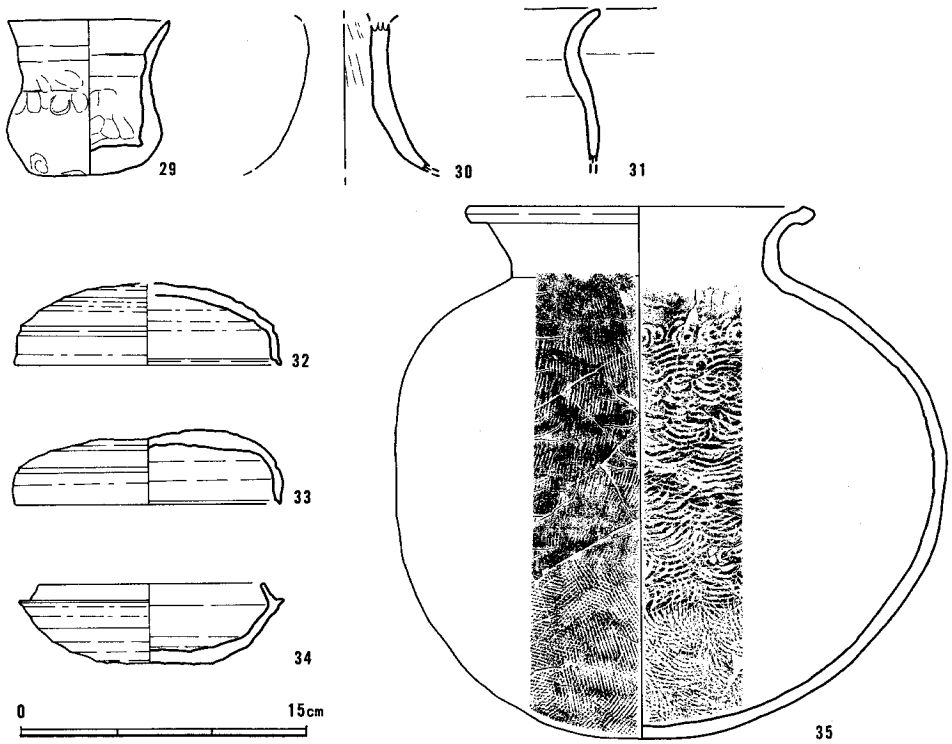


Fig.22　014(SC)出土遺物実測図(1/4)

具の痕が僅かに見られる。33も32と類似する器形、調整であるが、焼き歪みが著しい。内面天井部に同心円状の当具の痕が残る。34の回転ヘラケズリは体部の1/2以上に及び、底部中心までその痕跡を留める。内面底部に当具の痕が残る。35は底部近くを9.5cm×10.3cmの円形に欠く他はほぼ完形である。胴部は球形をなすが、一部歪みが生じ最大径部が平坦に近くなる。外面頸部以下胴部の上位まではカキ目、以下木目直行の平行タタキ後浅いカキ目を施す。内面は同心円状の当具の痕を残す。口径18.3cm、器高28.5cmを測る。

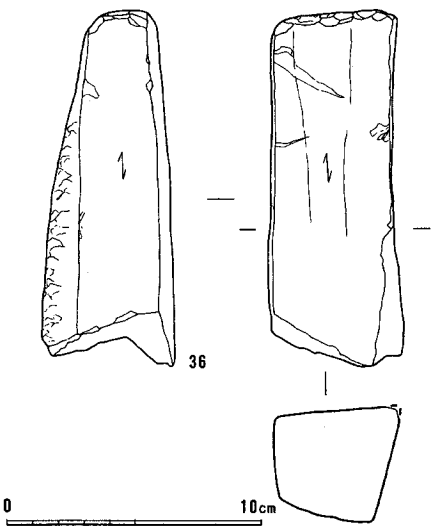


Fig.23　017(SC)出土石器実測図(1/3)

015、016、017(SC)

調査区西際で検出された。015は014には切られ、017を切る。015のプランは不明確で壁溝は検出されなかった。017の壁溝は東辺側で11cmを測り、幅9cm、深さ5cm

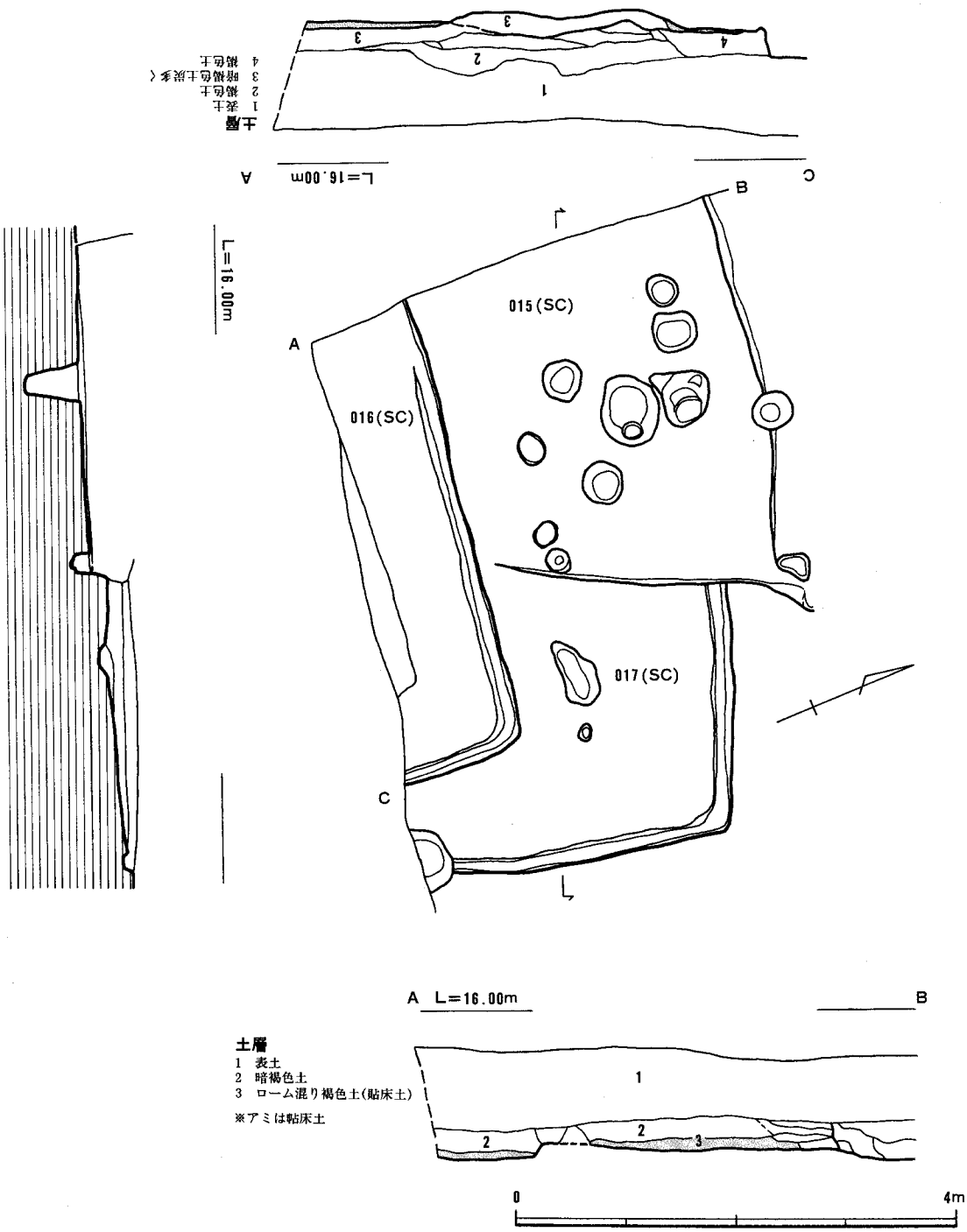


Fig.24 015、016、017(SC)実測図(1/60)

の壁溝が巡る。016は015を切るものと思われるが、土層からも明確な立ち上がりは認められず、他の住居跡との切り合い関係は不明。壁高は残りが比較的良好な南東コーナーで25cm、幅14cm、深さ3cmの壁溝が巡る。

遺物

少量細片のため、図示できるのは017壁溝出土の36のみである。36は砥石である。研磨された2面は平坦で、直行した面取りがなされる。他の2面は幾分砥面があるが、敲打痕を残し荒れている。端部にも敲打痕が認められる。

(3)掘立柱建物

018(SB)

調査区南東部の03、04(SC)掘削後、図上で復元したものである。柱間に差異があるが、各基底部のレベルはほぼ一定している。P_1の北側延長、P_2の東側延長方向に柱穴が検出されたが、柱間の距離、基底のレベルの差が大きい為含めていない。なお、住居跡の切り合う位置にあり、掘立柱建物跡としたが竪穴式住居跡の立て替え等含めた主柱穴の組み合わせの可能性がある。

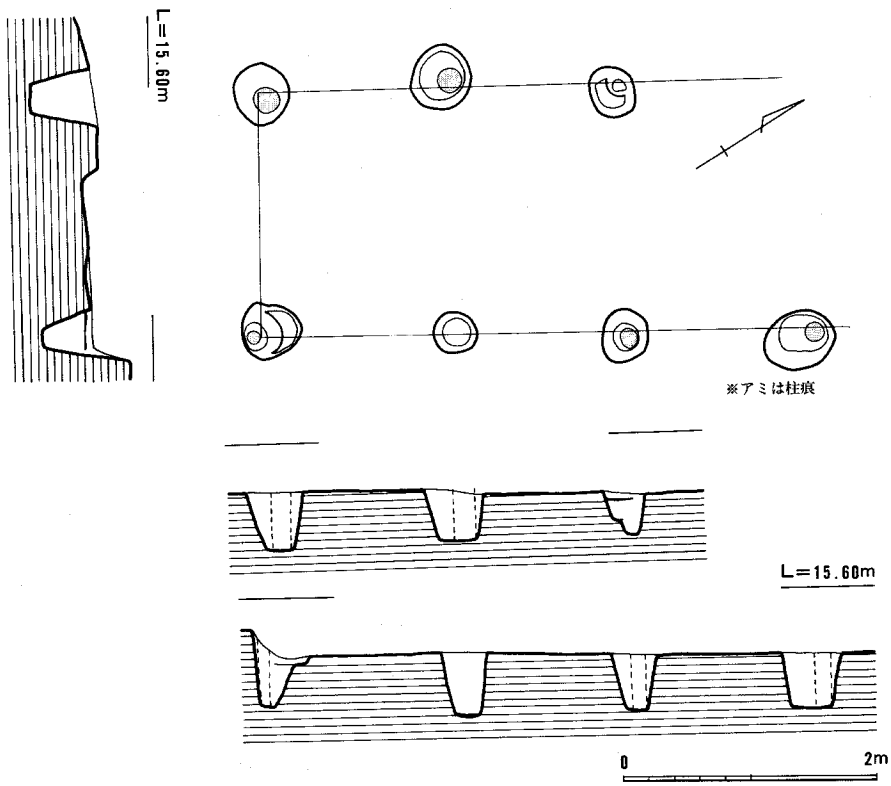


Fig.25　018(SB)実測図(1/60)

019(SB)

調査区東際で検出された。主軸は磁北から9°30′東偏する。南側のP9～P11は竪穴住居跡を切るが、誤認し、上部をカットした。桁行は6間でその柱間は210cm内外でまとまる。梁行の延長は調査区外のため不明であるが、柱間は狭くなる。各柱穴は1m内外の方形プランを呈し、深さ80cmを測る。桁行の柱穴基底レベルは地形に沿って、南側に下がる。柱痕跡は径20cm内外で検出されたが、P6、P7は最下面で圧痕状にみられた。

遺物

37～39は柱穴埋土から出土した須恵器である。

37はP3から出土。径2.3cm、高さ1.0cmの宝珠つまみ以外の体部は欠損して不明。焼成不良で脆い。38はP1から出土。立ち上がりは短く、断面三角計を呈す。39の内面底部は当具の痕状に荒れている。

020(SB)

調査区の南東部で検出された。2×2間の総柱建物に

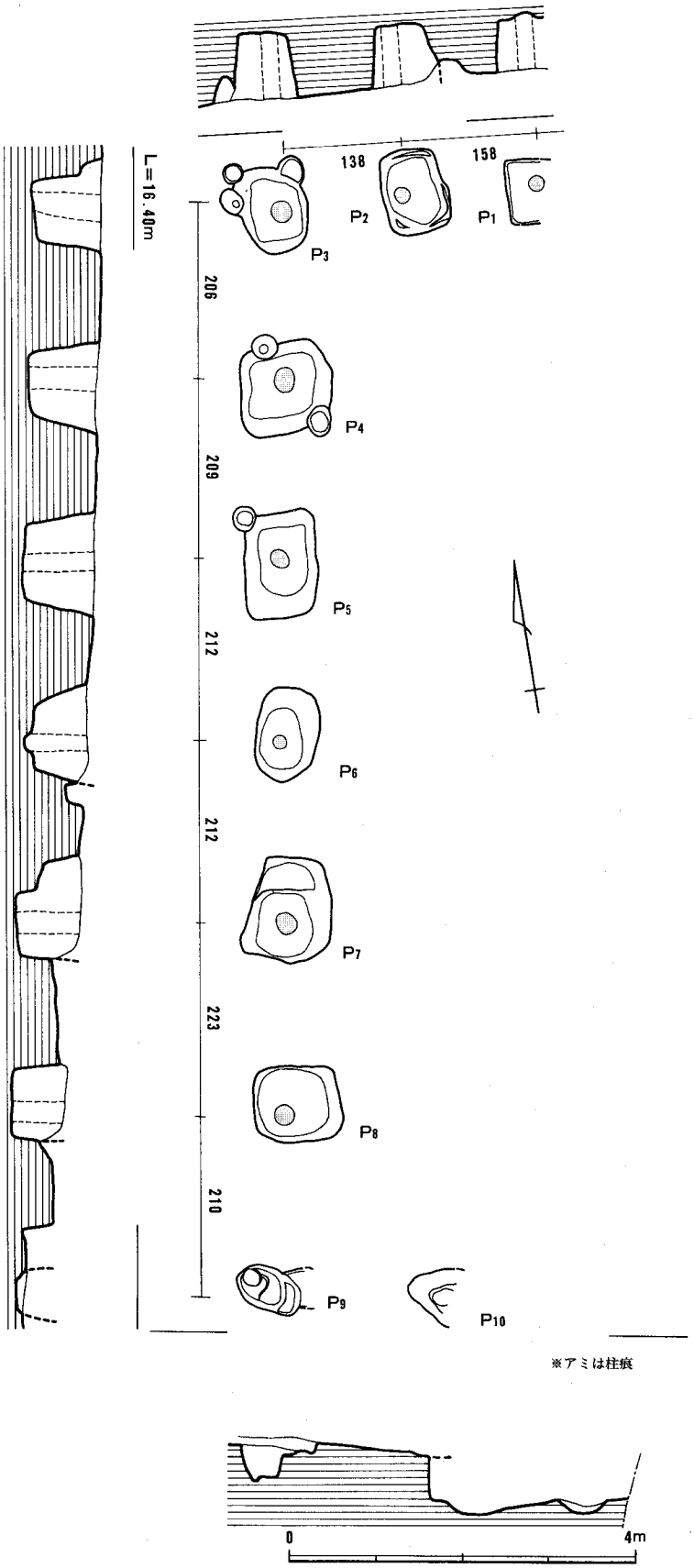


Fig.26 019(SB)実測図(1/80)

復元できるが、南側の2穴は07(SC)と切り合って不明である。柱穴径は20～25cm、深さ16～34cmを測り、中間のP_2、P_5が浅くなっている。出土遺物は土師器等の少量細片。

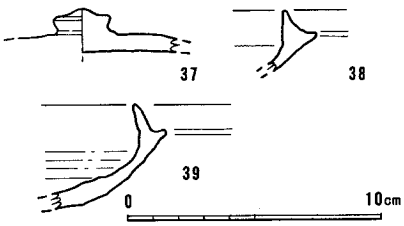


Fig.27　019(SB)柱穴出土遺物実測図(1/3)

(4)溝(SD)

05(SD)

調査区南東隅で02(SC)を切る。02(SC)埋土下層で切り合いが確認され、幅80cm、深さ20cmのプランが検出された。調査区壁面の土層断面から02掘方上部のレベルとほぼ同じく05の掘込みが見いだされ、上端幅3m弱、深さ約50cmを測る。埋土は灰褐色砂質～粗砂である。

遺物

土師器等の細片が少量出土。図示できるのは40のみである。40は土師質の摺鉢である。7本の摺目が単位で口縁端は平坦にナデ上げる。

08(SD)

調査区南側で検出された。N-6°-W方向に走行し、07(SC)を切る。検出面において幅90cm、北側は削平のため深さ24cmを測る。南側は住居跡と切り合ってやや掘りすぎているが、基底面は下降していく。010(SD)と直行する方向を取り関連が留意される。

010(SD)

調査区北側で検出された。ほぼ真西に走行する。検出面において幅120cm、基底部は西側に上がりその延長は削平のため不明

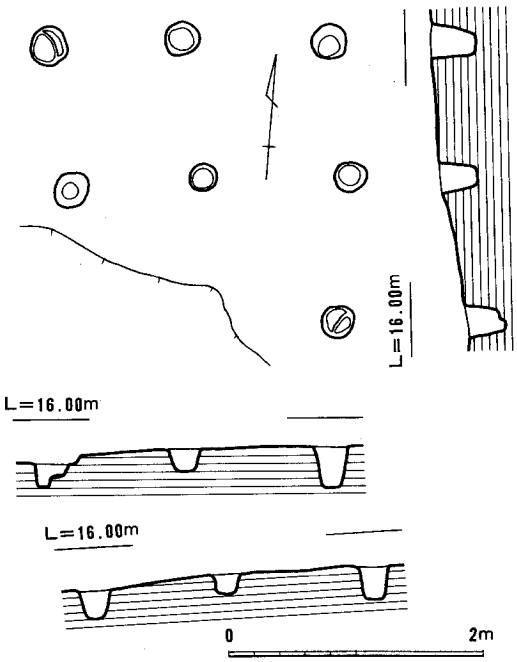


Fig.28　020(SB)実測図(1/60)

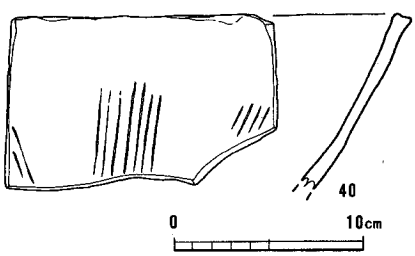


Fig.29　06(SD)出土遺物実測図(1/4)

となる。東側で深さ21cmを測る。なお、この溝以北では遺構が検出されず、約8m北側では地山が灰白色の基盤層に変わる。従って、北側へ急に立ち上がる地形であったと推測される。出土遺物は土師器の細片が少量のみである。

その他

41は02(SC)埋土から出土した打製石斧である。刃部、側辺部が擦れて滑めらかな面となっている。石材は片岩か。長さ15.0cm、刃部幅5.9cmを測る。当該時期に属する遺構、遺物は他には無い。

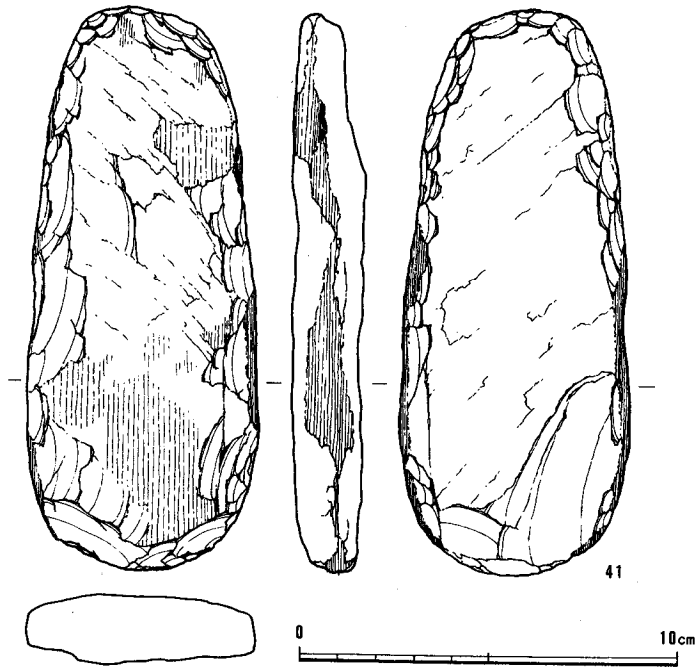


Fig.30　02(SC)出土石器実測図(1/2)

ま と め

遺構とその時期

竪穴住居跡

検出された竪穴住居跡は12棟である。いずれも地形が下降した南側と西側の調査区縁辺で検出された。中央から北側にかけては既に造成によって消滅している。時期は古墳時代後期の短期間にまとまる。

出土遺物の須恵器坏の蓋は天井部と体部の境に凹線を巡らし、口唇部に段を有す。坏身の内底部には当具の跡を残す。IIIA期(陶邑のII型式2段階)以降の時期に該当すると考えられる。プランが判るのは03のみである。カマドを設置した辺が長く、比率差が大きい長方形を呈しているが、カマドが壁辺の中央に位置するものかは不明である。

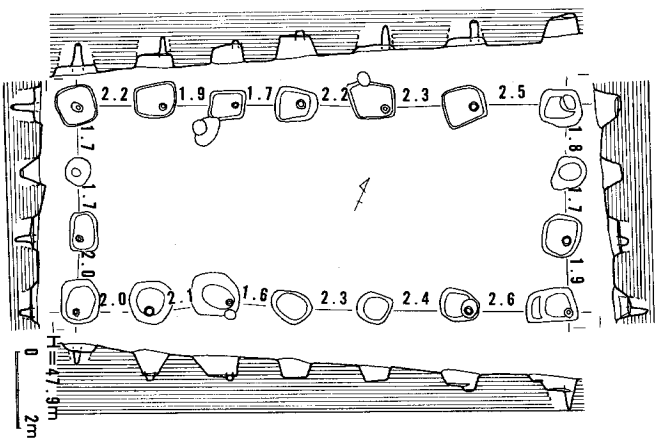
掘立柱建物

019は桁行6間(12.72m)の大型建物である。各柱穴は地形に沿ってその深さが下がるが、北側の柱穴の遺存が良い事はこの時期に現況に近い造成が行なわれたものと考えられる。明確な時期は決めがたいが、陶邑のIII型式2段階以降の時期と思われる。この建物を囲むように08、010(SD)が検出された。

参考に掲載したのは福岡市生松台遺跡で検出された掘立柱建物である。丘陵緩斜面に掘立柱建物群がきずかれ、その時期は7世紀後半～8世紀初頭と報告されている。その立地、規模、時期がきわめて類似する。

その他

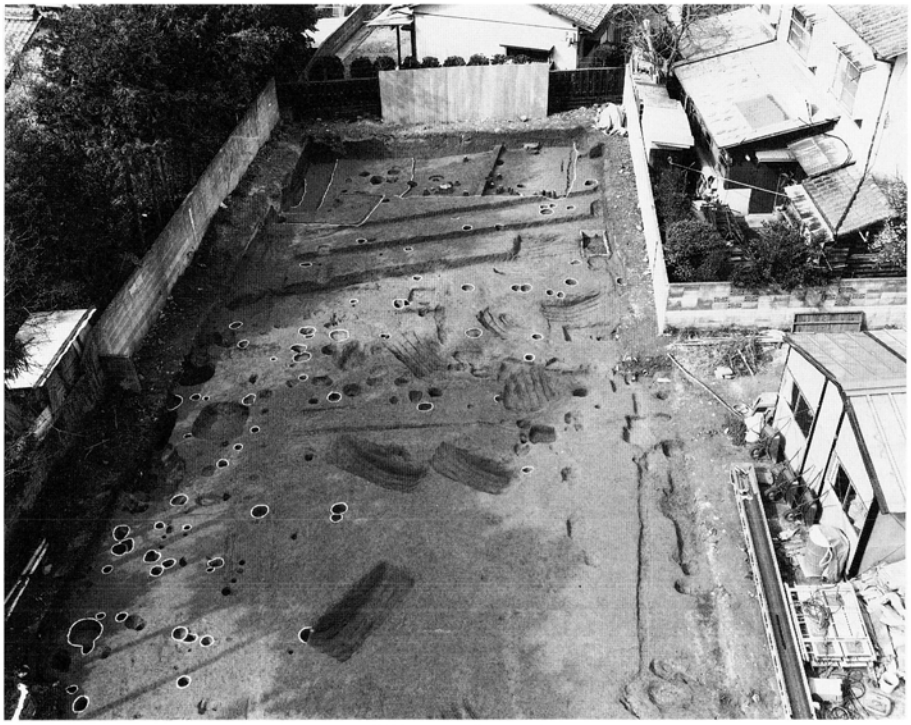
遺構検出時に青磁片がわずかに出土し、また005(SD)は近世と考えられる。この時期の柱穴が北側に散在するものに含まれている可能性がある。



参考　生松台遺跡　SB200　(1/200)

PLATE

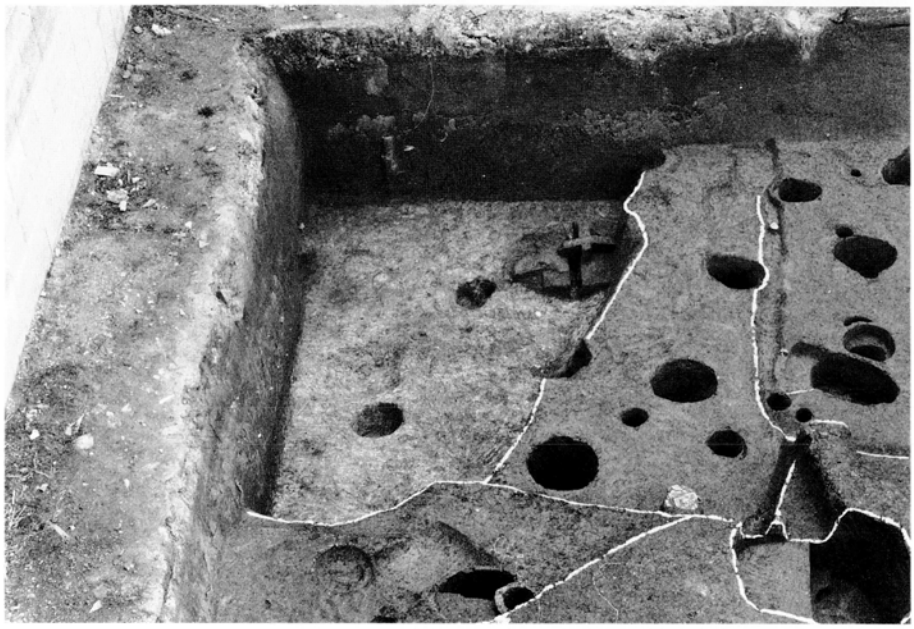
調査区東半(北西から)



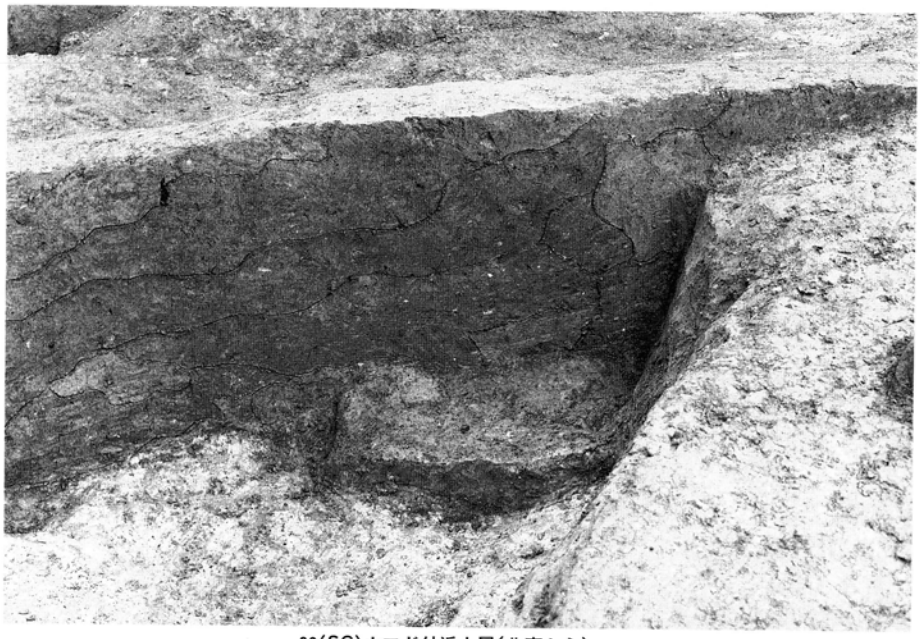
調査区西半(東から)

PL.2

調査区南西部(北西から)



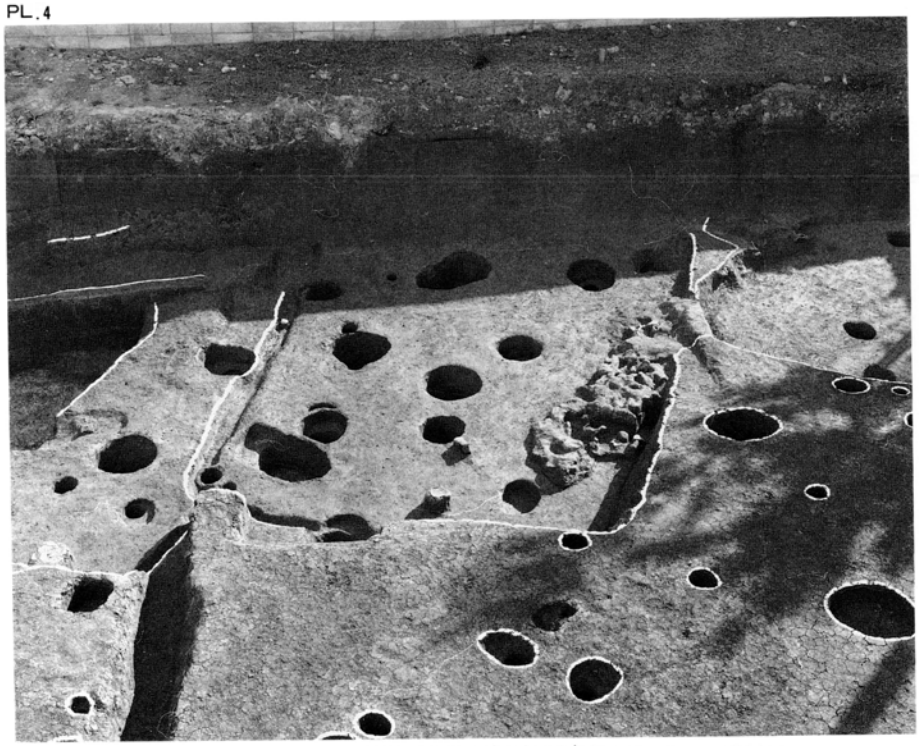
02(SC)、04(SC)完掘状況(北から)



02(SC)カマド付近土層(北東から)

02(SC)カマド完掘状況(南西から)

PL.4



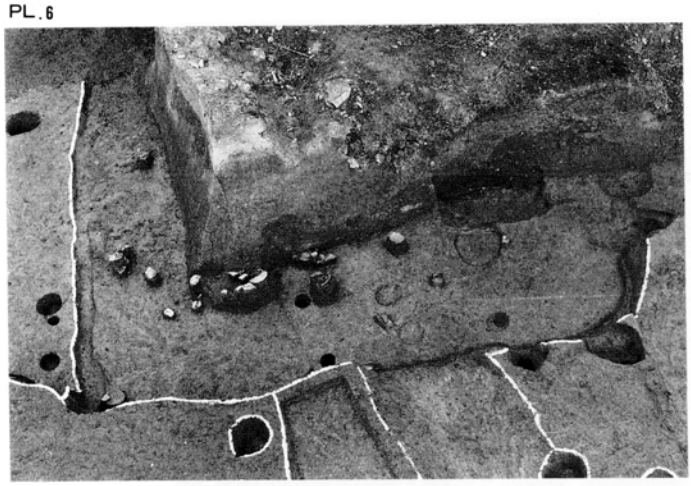
03(SC)完掘状況(北東から)

03(SC)カマド完掘状況(東から)

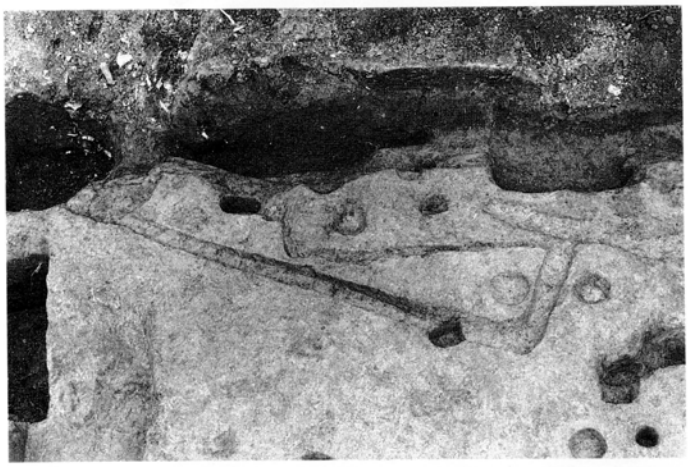
06(SC)、07(SC)、08(SD)完掘状況(北から)

06(SC)カマド完掘状況(北西から)

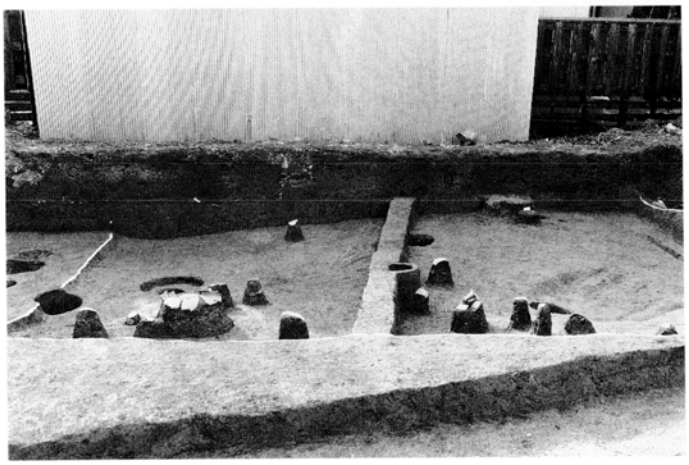
PL.6



07(SC)完掘状況(北から)



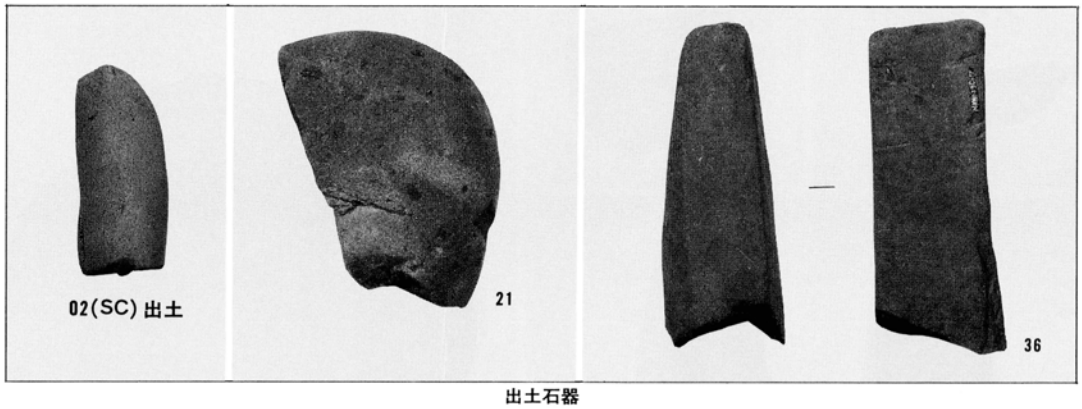
012(SC)、013(SC)完掘状況(北西から)



014(SC)完掘状況(東から)

020(SB)完掘状況(北から)

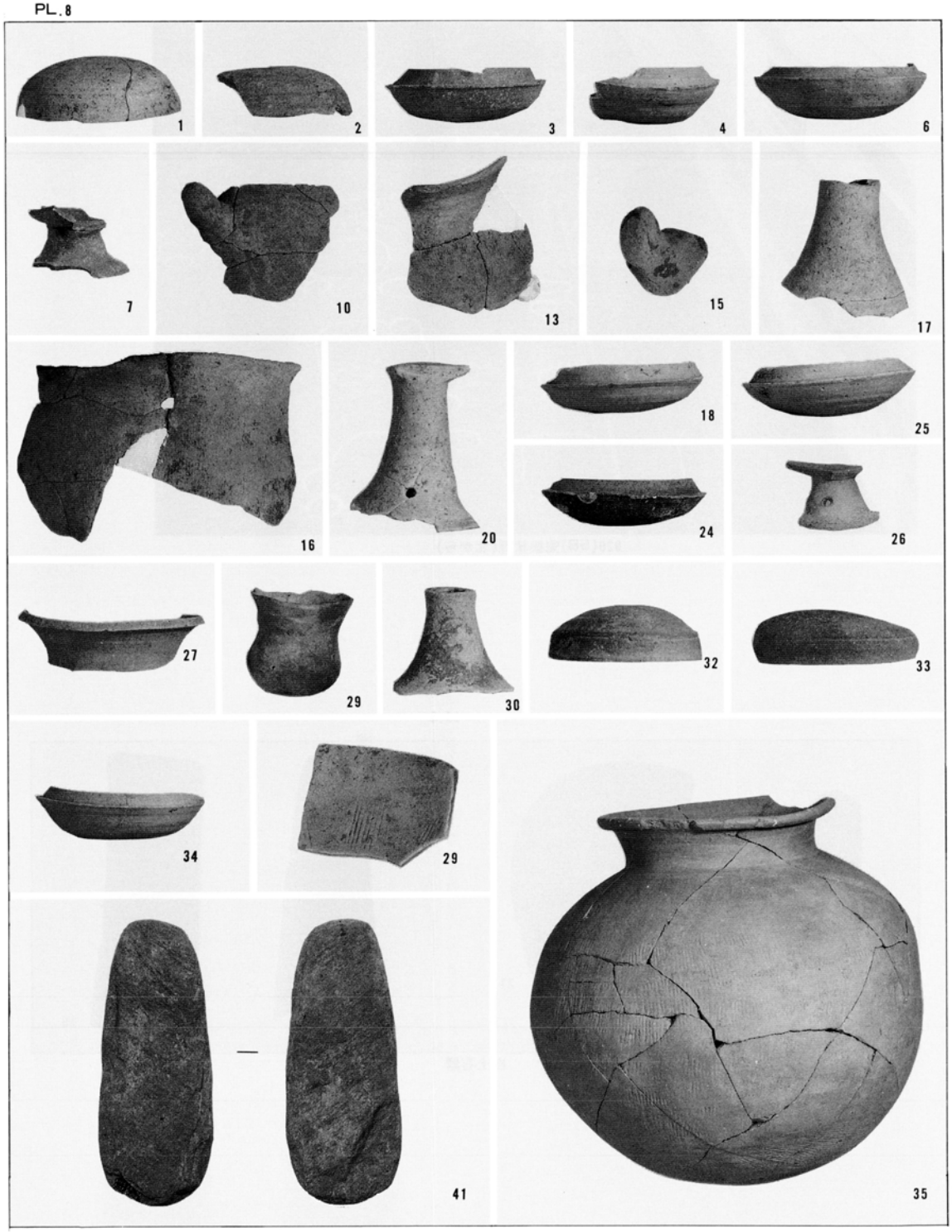
13.5



5

出土石器

PL.8



出土遺物

福岡市埋蔵文化財調査報告書第373集

中村町遺跡1

1994.3.31

発　行　福 岡 市 教 育 委 員 会
福岡市中央区天神1丁目8－1

印　刷　大野印刷株式会社
福岡市博多区榎田2丁目2-65